

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	復讐（前號の續）（エミール、ゾラ作）：翻譯
Author(s)	島，隼人
Citation	龍南會雜誌， 1 5 8： 6 8 - 9 4
Issue date	1915-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6498">http://hdl.handle.net/2298/6498</a>
Right	

# 復

## 讐

(前號の續)

エミール、ヅラ作

一、三、丙 島 準 人 譯

## 第二幕

同じ室。

一ゲ年経過して居る。しかし室の設備には何の變りもない。洋燈が點火つて居る。夜の十時。

### 第一場

テレーズ。グリヴェー。ローラン。ミシヨ。夫人。シユザンヌ。

總ての人々。(第壹幕の終りと些の違ひなく坐る)

テレーズ。(右手、仕事卓に倚つて仕事を膝に、愁はしげに且つ難ましげに見ゆる)

グリヴェー。ローラン。ミシヨ。(中央と圓卓の周圍に席を取つて居る)

(カミーユの安樂椅子には主が居ない)

夫人とシユザンヌ。(暫らくは第一幕と同じやうに、茶の給仕をする)

ローラン。些たお慰みもしないや、小母様——ドミノを貸して下さい。

シユザンヌ。も些し砂糖を上げませうか、グリヴェー様。

グリヴェー。有難う。シユザンヌ様、貴方は眞實に可愛らしいね。二切れ、お願い出来るならば——

二切れ。

ローラン。(この時には、ドミノの函を受取つて居る)そらドミノが來たぞ。何卒小母様、坐つて下さい。

夫人。(坐る)

ローラン。處で、皆な集まりましたか。

ミシヨ。皆なく。何時初めてもよろしい。今夜こそは吾輩の手並を見せてやるぞ。たゞ、もう些つとばかりラム酒を入れてから(ラム酒を茶に注ぐ)

ローラン。さあ、もう皆なだねえ。初めても好いんだね。(ガチャ／＼と石を打ちあける)  
勝負をする人々。(混せて石を取る)

グリヴェー。實に面白いなあ、此奴は。さあ——皆な七個づゝ取つた。もう好いよミシヨ様、混ぜなくつても。そう——それで好い。今日は私の番ぢやなかつたなあ。

夫人。(泣出す)もう／＼辛棒が出來まへん。

ローランとミシヨ。(立上る)

シユザンヌ。(頭を夫人の安樂椅子に凭せかける)

夫人。皆様が以前みたいに、大きな卓の周圍に集つてなはるのを見ると、遂ひ思出して——胸も裂けそうだんね。この處にカミーユが腰を掛けてましたのに。

ミシヨ。ですが困りますねわ。奥様、もう少し氣を引立てなければ不可まへん。

夫人。堪忍しとくれやす。如何しても辛棒が出來まへんだものやさかい。貴方様方も御存知のやうに、ド

ミノが飯よりも好きでたまはしたのにな。石を打あけるのは、何日も彼子でおました。それやのに、今はローラン様がしやはつた。恰度カミューみたい。それがだすね、手の動かしがた迄で宛然カミューだすね。私が、思切も早う坐らな、腹立てゝな喧嘩だした。腹を立てたら不可んのに——即時に病氣になりますねんさかいな。それが私の心配で、氣の安まる時ちうたらたまへなんだ。眞乎にあの頃は、美しい樂しい晩でたまはしたなあ——それやのに、彼子の席には誰も居まへん。見向かうとする人も居りまへん。

ミシヨ。奥様、其處に思詰めちや不可ん。貴方までが病氣になりますよ。

シユザンヌ。(夫人を抱いて接吻しつゝ) 小母様、もう泣きなさいますな。皆までが悲しうなつて來ます。

夫人。眞乎に然うでたまはしたな。氣丈せな駄目へん(泣く)

グリヴェー。(石を押しやつて) だが、ドミノを遊つて貴方の氣が晴れぬなら、行らぬ方が優良だ。泣いたとて

何もなりはせぬ。子息様が取返せるものでもない。

ミシヨ。私等は皆な、一度は死ななくちやなりません。

夫人。あゝ。

グリヴェー。私等が來たら、些た紛れやうかと、たゞ貴方を思ふばかりで來たのだ。

ミシヨ。骨折つて、貴方が自分で忘れるやうにしなくつちや。

グリヴェー。左様だとも。私等が來たばかりに、反つて悲しい思ひをさせたであつては、甚だ以て、迷惑千

萬だ。わい賭は幾何かい。一番で二の口は如何た。勝負う。

ローラン。もう直ぐですから。何卒、たつたもう一二分間待つて上げて下さい。小母様が氣を取直す間。――皆なはカミーユ君の死を泣悲しんで居るんですよ、眞實。

シザンヌ。お聴きなさい小母様。私等皆なは、カミーユ様のことを泣いてるんですよ。小母様と一緒に皆――

（夫人の足下に坐る）

夫人。熟うく解つとります。皆な好む方ばかりです。お遊びの邪魔しましたけれど、腹を立たてなはらぬやうに。

ミシヨ。誰が腹なんか立てるものですか。まあ、熟う考へて御覽なさい。不幸があつてから、もう疾に一年は経つて居ますよ。好い加減に貴方も氣丈夫なさになくちや。

夫人。私にや、時なんか有へん。年なんか有へん。涙が眼充溢になります故、泣きますねんや。どうぞ堪忍してくれやす。いつも私には、あの子がセイヌの穢い波に流されてる處が見えますねん。かと思ふと又、いかにも幼うてな、私が寝しつけとる處が、眼に浮びますのや。何ちう恐ろしい死様やろ。嘸ぞまあ苦しかつたやろな。私には既に、虫の知らせが有つたものやよつて。舟遊びなんていふ趣向は、止めるやうに請願んだのやつたけれど――さうや、勇氣の有るといふ處が見せたかつたのや。まあ、貴方らが知つて呉れやしたら、察しても呉れやはりまつしやろが、彼子が未だ搖籠の中に居た時分には、如何して私が育てて來ましたやろ。何日なんぞも、彼子が甚い熱に罹つた時には、三週間ちうもの、晝も夜も、膝の上に乗せたまんまで、辛つと生命だけは取止めたものでしたに。それが――

ミシヨ。でも貴方には、未だ姪御が居るぢやありませんか。姪御に、甚く悲しい思をさせなさるばかりか

姪御を救つた勇敢な友達をまでも、同じやうに悲しみ悶もねさせなされるのは。そうですとも、それや苦しまぎれの吾儘しやうといふものですよ。だつて御覽なさい、貴方は始終ローラン君の心を、靜かにしはて置かないぢやありませんか。カミーユ君をも、岸に連れて來ることが出來なかつたのは、彼の人の終世の恨事うらみでせう。

ローラン。思出しても殘酷せごたしい。

ミシヨ。でも君は、盡せるだけの事はしたのだ。舟が材かに衝突あつて顛覆した時——ほら、その材は、漁夫が網を張るために、使ふやうなのだらう。

ローラン。然さうですよ。どしんと衝突つつて飛上る途端に、三人とも水の中へ落ちたのです。

ミシヨ。そして水の中ちや君は、テレーズ様だけしか掴つかめなかつたのだらう。

ローラン。泳いでると、テレーズ様が近くに居るのを感じたので——つい着物さへ、掴めば好かつたものだから、それでテレーズ様は助かつたのです。カミーユ君をも、同じ瞬間に助けやうとしたら——ふつと沈んで見になつたのです。カミーユ君は、舟の真舳はしに坐つて、燥はぎ切つて、手を娛なみに水に浸けながら戯言じやうごなんか言つたものです。「この肉羹ブルヨンは冷た過ぎるなあ」なんて。

ミシヨ。其處そこことは想出さぬが好い。君に又、心苦しい思をさせるだけだ。君は男らしい振舞をしたのだ。

三度まで續けざまに、水の中に飛込んで、友達を救はふとしたものの。それが勇敢でなくつて——

グリグエー。勇敢だともさ。誰が何と言つても私はさう思ふ。だが新聞にも、同様立派な論説が載つてたなあ。概してローラン君に、救命賞牌を與ふべしといふ説だつたやうだ。あんな怖ろしいことも無いもの

だ。三人の人間が溺れるなんて、しかも其の三人の晝飯が注文へられた瞬間にな。そして一週間も経つて、カミーユ君の死骸が漂着した時——やつと新聞に出たのだつた。なあ知つてるだらうミヒョー様、貴方はローラン君と一緒に、カミーユ君の検死に行つたのだから。

夫人。(更に嗚咽涕泣し初める)

ミシヨ。(激してさすがに聲低く) これグリヴエー様、貴方は些とも見境がない。奥様の氣が、折角些しばかり落着いたと思ふたら——言はずとも可いことを嘸々と喋言つて。

グリヴエー。(怒つて、矢張り小聲に) ほう、これは聞きものだ。貴方が又、あの事を話し初めたのぢやないか。ドミノを遊ばなきや、話でもしなければ何が出来る。

ミシヨ。(聲を次第に高める) へ面白くもない、何度など同じことを喋言りなさるが好い。聞き度くも無いや、新聞の論説なんぞ。可哀さうに奥様を見なされ。もう既に落着いてなすつたのに、又戯言を初めなすつた。

グリヴエー。(立上つて叫ぶ) 何と言つても言出したのは貴方ぢや。

ミシヨ。(同様に) 何を篋棒な、貴方だ。

グリヴエー。何だぞ。それや私が問拔けたと言ふのと同じぢや。

夫人。た二人ども、何卒腹を立てずに置いて下はれ——

グリヴエーとミシヨ。(奥の方へ行つて、尙ほ暫くは一人ぶつ／＼言ふ)

衆人。私も、聞分け好うなります故に、もう泣きはしまさん故に。そやけんど、話してると心が輕うなりま

んねや。皆様には濟まぬことをしたと思ふてまんねやけれど——就中、貴方にはなあ、ローラン様。握手をしよういな——怒つてゐるのかいな。腹を立ててゐるのん。

ローラン。(近寄りつつ) 腹の立つのは、私にだけです。二人とも助けることが出来なかつたので。

夫人。(ローランの手を握つたまふ) 今では貴方が私の子や、そして好きやねん。毎晩、私は貴方のために、を祈りをしてまんねやで。大事な私の子を、救はうとして呉れやはつたのやよつてに。ほれからなあ、絶対に貴方を守つて呉れやはるやうに、天に頼ひしてまんねや。なあローラン様。あの子が天に居つて、私の祈禱を聽いて呉れまつせ。た蔭で、如何な幸福な眼に、會ひなはるか知れまへんで。何でも餘程嬉しいことが有つたら、其の度に、私が頼ひしたのやと思ふとくれ。それから、カミーユが聽入れて呉れたのやと思ふとくれや。

ローラン。何を、小母様。

ミシヨ。結構だつた。まあ好かつた。

夫人。(シユザンヌに) さあ、もう席に歸つて呉れ。優しい心のた禮には、ほうら笑ふて見せたで——

シユザンヌ。(立上つて抱く) 有難う、小母様。

夫人。(悲しさを堪へてドミノをする爲めに中央の卓につく) さあ誰何からや。

グリヴエー。こいつあ不思議だ。貴方が遊るた心算か。發心しなすつたものだなあ。

グリヴエーとミシヨとローランと(各席につく)

グリヴエー。誰からだ。



ミシヨー。私からだ——そうら(石を置く)

シユザンヌ。(テレーズに近づいて居る) ねね姉さん、今から私の青い皇子様プリンスのことを話しても好いこと。

テレーズ。青い皇子様プリンスのことを。

シエザンヌ。(足壺を取つてテレーズの足下に置く) それや奇異ふしぎな話なのよ。でも全く低い聲で話さなくつちや。叔父様なんか、知らなくつても好いことなのよ。まあ此麼風あんなふうに考へて頂戴、その若い方は——若い方なんて、前置こきわなくつても解わかつてますわね——その方は、青い上衣を着て居て黒い髭ひげを生はしてるの。それが又非常によく似合ふのよ。

テレーズ。氣を附けなくつちや、叔父様が聞いてますよ。

シユザンヌ。(宙腰になつて勝負して居る人達を觀る)

ミシヨー。(怒つてグリヴェーに) 最初の中は、五が出るとバスばかりしてわいて、今頃になつてから五ばかり置くなんて——

グリヴェー。バスはやつたよ。だから此麼あんなに謝罪あやまつてるぢや無いか、ミシヨー様。

ミシヨー。(反對する)

(遊戲は續く)

シユザンヌ。(再び腰を掛けて低い聲で話してける) 本當に。うちの叔父様がドミノを遊あつてゐる時には、他の事など眼にも耳にも入る處か。處でねね、その若い方は、毎日リエクサンブールの公園へ來たのよ。私等と同じやうに。はら貴方も御存知でせう、叔父は何日いつも見晴臺テラスの左側の三番目の樹の處に腰を掛けるのでせ

う、新聞閱覽所の隣りの。處が青い皇子様は、四番目の樹の處に腰を掛けたのよ。本を手にとつて、讀んでるやうな様子だけれど、頁を捲る時には何時も、私を密と見るの（時々叔父の方を見て未だ遊戲に陥込んで居るのを確める）

テレーズ。それで終局なの。

シユザンヌ。それが終局——詰り、ルユクサンブルの公園であつたことは——それで終局なの、詰り、いゝね——そんな事は、直ぐに忘れてしまつたかも知れないわ。處が或る日のことなの、私達が平常のやうに又、ルユクサンブルの公園に腰を掛けて居たらね、あの人が大變な勳功をして見せたのよ。小さな女の子が遊びに夢中になつて、輪を眞正面に私の方へ向けたの。それを見兼ねて、あの人がほんと一つ平手打して、輪の方向を變へさしたのですわ。巧かないこと。私は御禮に些と笑はなきやならなかつたわ。だつて、あの人が戀人を所有る危険から救出す、度胸のある人の如に思へたのですもの。貴方には左様は思へない。あの人も必と、同じやうなことを考へたのに違ひないわ。だつて同様、笑を含んで密と私に會釋したもので。

テレーズ。それで愈よ變物語はわしまひ。

シユザンヌ。やつとは是からよ。一昨日、叔父がね、又出て行つて、終つて、退屈で死んでしまひそうだったの。だつて、自家の下女は馬鹿なもんだから、話しなんか出来やしないのよ。それで少しばかり、時間つぶしに、古い叔父の望遠鏡を持出して——貴方は、Vernon 時代から御存知ですわね——あれを屋根上の物見臺に据ゑて見たの。二哩から見渡されるんだもの、自家の物見臺からちや、巴里の美し

い斷片が見られるわ。眼鏡を Saint Sulpice の側堂へ向けて見ると、それはく美しい像が見えたわ——  
塔にね——

ミシヨ。〔品奮してグリヴェーに〕早く早く。六だよ。早くたやりつてば。

グリヴェー。六ど。六ど。それや解つてるよ。ぢやが熟く考へて見なくちや〔彼等は勝負を續ける〕

テレーズ。そして青い皇子様は。

シュザンヌ。今に言ふてよく。屋根と煙突以外には何も見ねないのよ。宛然煙突の兵隊さんが列んでるやうなの。ほん些つと眼鏡を動かしても、煙突が走るこゝと、後からくゝと、宛然兵隊さんが一聯隊も

側を通るやうなの。眼鏡の中は煙突で充滿。すると突然、二本の煙突の間に見えたの。誰がだと思つて。

青い皇子様なのよ。

テレーズ。それぢや、青い皇子様は煙突掃除人夫なの。

シュザンヌ。〔立上りながら〕なんの、姉さん。同様私みたいに物見臺に上つてたのですわ。それに可笑いぢや

ないこと。やつぱり望遠鏡で覗いてるのよ。それが又分明見ねるの。矢張り青い上衣を着て居てね、

髭も見ねるの——それは明白だよ。

テレーズ。そして何時までも居て。

シュザンヌ。それや知らないわ。私は只だ、望遠鏡で見ることが出来ただけですわ。必と Saint Sulpice の側堂まで、随分遠く離れて居たのよ。眼を離すと何も見ねないの。何もかも唯だ漠々と灰色に見えて、石板屋根のキラ／＼光るのが、青味を帯びて見ねるだけ。も少しで、あの人を見失ふ處だつたわ。望遠鏡

が、ほんの些ど動いたわけでも、直ぐに大變な家の海の旅行をしなきあ、見つけ出せないのですもの。  
しかし今ぢや、見當が解つたから見失ふ氣使ひは無いわ。隣家の風信旗が標なのよ。

テレーズ。それから又見かけて。

シユザンヌ。わゝ見ましたわ。一昨日も、昨日も、今日も、毎日よ。でも何も悪いことぢや無いでせう。貴方だつて知つて下すつたら、望遠鏡ぢや、それや小さく可愛らしく見わるのよ。人形程もない位なのよ。だから、些ども恐ろしいことなぞ無いわ。私は眞實些ども知らないのよ、あの人の居るのが何處で、眼鏡に見わたることが皆な眞實か。それ程、恐ろしく遠方に居るのですわ。若し斯うした時には（キスを投げる様子をする）此方で急いで身を引くだけですわ。すると、直ぐあの灰色の漠々より他には、何も見わなくなるのよ。そして何も見わなくなると、青い皇子様は此處どこしなかつたのだと思へるの——（キスを投げる風）だつて彼の人其處に居なくなつて、眼を幾ら大きく開けて見ても、見えないんですもの——  
テレーズ。（微笑して）面白かつたわ（ローランを見守りながら）貴方の其の青い皇子様を夢でばかり戀して居らつしやいよ。

シユザンヌ。嫌あよ。でも、もう言はずに置いて頂戴。勝負が決いたのですわ。  
ミシヨ！。やれ〜。今度は二回目か——いよ〜本勝負だよ。グリヴェー様。  
グリヴェー。御意の通りぢや（石を打まける）

夫人。（安樂椅子を左方に押しやる）ローラン様。貴方立つとつてやよつてに、便次に私の小さな細工簞を取つて來てた呉れんか。毛絲が入つて、私の部屋の簞笥の上に在るさかい。燭を持つといで。

ローラン。要りませんよ、其麼ものは（中央の扉を出て行く）

ミシヨ。實際息子様の好い代りが出来ましたなあ。ほんに氣立の好い——

夫人。實際だんね。それは好うして呉れまんねやで。骨惜しみもせずになあ、些とした私等の仕事を、何呉

れとなく手傳うて呉れますしなあ。夜は夜で、店閉まひまで手傳うて呉れまんねや。

グリヴェー。二三日前にはそれ處か、本物の賣子女も及ばん程上手に、針を賣つてるのを見掛けなつて。は

はは、髭の生れた賣子女か、ははは——

ローラン。（中央の扉を通じて部屋に飛込む。何かに追ひかけられたやうに青くなつて取亂して居る。暫くは戸棚に倚り掛かつて居る）

夫人。わやまあ。如何したんや。

ミシヨ。何處か悪いのか。

グリヴェー。何かに衝突つたのか。

ローラン。いや——なあに、何でもなし——血が上つたのです——（足下危く前面に来る）

夫人。そして籃は。

ローラン。籃は。眞實わからなかつたので——持つて來はしなかつたのです。

シユザンヌ。一體、どうなすつたの。何かに喫驚なすつたやうね。

ローラン。（強いて笑はうとする。喫驚した。私が。何を馬鹿な。たゞ籃が明らなかつただけだ。）

シユザンヌ。（愚弄つて）見て、御覺なさい、ローラン様。私が見つけて來ますから。そして貴方を怖らした幽

露が居たら、連れて來て上げますわ（中央の扉を通じて去る）

ローラン。(氣を落着けながら)はら、もう何ともなくなりました。

グリヴェー。君は健康過ぎるのだね。血が君を静止させちや置かないのだらう。

ローラン。(戦きながら)然うです。血が静止させちや置かないんです(緩やかに右の方へ移つて行く)

ミシヨ。(坐りながら)何とか今の間に、思切つた療治をして置かないと。

夫人。私も何日の頃からやつたか、貴方の様子の變うなつたのに、氣は附いてたんや。氣の靜まる水藥を作へたけよう。

シユザンヌ。(籃を抱へて中央の扉に入つて来る。そして夫人に籃を渡す)

夫人。たゞ歸つてないでだなあ。籃は。

シユザンヌ。箆笥の上に在りましたわ(ローランに)ローラン様、貴方の幽靈には遭はなくつてよ。私が行つたので逃げて終つたのでせう。

グリヴェー。小ぼけな悪魔めが。(左方、下の店で鈴が鳴る)

シユザンヌ。貴方は靜坐して被居しやい。私が降りてつて用を足して來ますわ。

(左方に行き、店に下りる)

グリヴェー。好い娘だ、實際あれは(ミシヨに)處で幾個置いたつけなあ、私は。貴方が二十八で、私が三十二か。

夫人。(籃の中を捜したが無いので、左手前よりの暖爐の上に置く)肝心の毛絲が入つたらへん。私も店へ下りてかんならん(左方に行つて下りる)

## 第二場

テレーズ。 ローラン。 グリヴェー。 ミシヨ。

グリヴェー。(宙腰になつて低い聲で)なあ、ミシヨ様。私等の仲間あ、大方皆なけちが附いてしまつたなあ。此家も、もう以前程には面白くなかつた。

ミシヨ。(同じく低聲に)そうだよ。癖になつてねえ——一度死神が家の中へ舞込むと、しかしまあ、私に任しどきなさい。些とばかり考へついた事があるから。木曜會を今一度、愉快なものにして見せますよ(二人は勝負を續ける)

ローラン。(テレーズに近づく)

テレーズ。(低くローランに)喫驚したの。

ローラン。(低く)呟。今夜は來なきやならぬか。

テレーズ。いゝね。——不可ん。辛棒たしよ。本望の叶ふ日まで、た互に氣を附けなくちや。

ローラン。一年間も、氣をつけて來たぢやないか。一年間といふ長い間、た前と唯だ二人で居つたといふ事は無いぜ。何のことは無いのに——あの小さい扉を通して來れば——今こそ思ふまゝだぜ——二人で居れば——た前の部屋にな——どちらも怖くはなからうに。

テレーズ。いゝね、不可ん。未來を毀しますまい。私等には、澤山な幸福が要るのぢやなくつて。其處ことは何時だつて、出來るぢやないの。

ローラン。そうだ、未來を信じるが好い。二人が互の所有になつたら、少しは落着けるだらう。一緒になつ

とれば、恐いことも無くなるだらう。今度は何日来れば可い。

テレーズ。私等の結婚式の日。もう直ぐよ。二人の望の叶ふ日は、懸て間もないわ。靜かに——叔母が來た。夫人。(左方から上つて來る)

### 第三場

前場の人々。夫人。

夫人。テレーズ、店へ行つといで。誰何や面會たい言ふとつてや。

テレーズ。(眼につく程悄然として、左方に行つて下りる)

### 第四場

ローラン。グリヴェー。ミシヨ。夫人。

皆の人。(眼でテレーズを追ふ)

ミシヨ。テレーズ様を見なすつたか。今。まだ甚く悄然と、心に苦しんでるやうですわね。

夫人。毎日視てまんのに、日増しに慘めな様子になつて來て、眼は曇つて來るし、手は熱でも病んでるやうに、ぶる／＼顫へまね。

ローラン。そして時折、頬に明かな潮紅が見られますわね。肺病患者のやうに——間歇熱でせうけれど。

夫人。貴方が最初、その氣が／＼な徴候を注意して呉れたんやつたな、ローラン様。處が、あつした徴候は毎日／＼増えて來るばかりや。あゝ神様、私には少しでも、苦痛を與へないでは置かれませぬか。

ミシヨ。何ですよ。大騒ぎして。それや神經といふものです。直ぐに平癒りますよ。



ローラン。それや左様かも知れませんが。しかし心に受けた打撃は随分甚いものですよ。あの陰氣な沈黙の中に、あの青褪めた微笑の中に――何か知ら――何かしら――永久の袂別の如なものがあります。悲歎が次第に食殺すのです。

グリウエー。それを放つて置いてゐるのは、君も甚いぢやないか、ローラン君。テレーズ様の氣を晴らすやうに、せにやならぬのに。始終、陰氣な思ひに苦しまして置かずに。

夫人。いわ左様やたまへん。ローラン様の言ふことが眞實だす。餘程、徹へてまんねや。樂しむなんちう氣は、露程も有へん。私も考込ますまい思ふて、餘程やつて見ますねんけど、辛棒し切れんやうになつて、終ひには怒出しまんね。傷負の獸みたいに、苦しみながら靜と這ひ忍んでまんねん、ローラン。私も匙を投げたんです。

夫人。これが一番最後の打撃でたます。もう彼女より他には、誰も居りまへんねんさかい。テレーズを頼りにしてましたのにな――死水を取つて貰はうと思つて。彼女が死んだら、私一人店に残る譯や、世間から見捨てられて、寂しい片隅で死ぬことやらう。あゝ――私位ひ不幸なものが居まつしやろか。何の罰で、此麼苦しい思をせならんねやらう（泣く）

グリ官エー。（低く、心配そうに）ドミノを遊らうか、それとも止めやうか。

ミヒヨー。黙言つてなさいよ。何を戸惑うて、其麼（立上る）如何でも、も一度手段を構じなくちや不可。テレーズ様のやうな若い女なら、何とか慰められない筈は無い。Saint Ouenの不幸があつた後で、よく泣いてましたか。

夫人。いゝね——平常は、それや甚く泣きまんのに。泣けさへしたらなあ。あの子は苦しいのに、黙言つとつて、精神も身体も疲れてしまふて、ぐつたりなりましたんや。歩き過ると、屢う彼麼風になるもんだすげぞ。氣拔けたやうでなあ、今日頃からや、非常憶病にさへなりましたわ。

ローラン。(顫ひつゝ)憶病に。

夫人。いゝ——何日かの夜も、呻いて聲を立てまんねや。急いで行つて見たら——私が解らいで、何つて言

ひまんね——

ローラン。魔されたんですね、それや。口を利きましたか。何か言ひましたか。

夫人。それが解りまへんね——カミーユを呼んでるやうだんねげぞ。夜は燭をつげんと、此室へ上つて來やうともしまへんし、朝になると疲れ切つて——引摺るやうにして歩きません。弱り衰えてなあ、眼は空を凝視てる。痛々しうて、二眼と見られたものや有へん。もう長いことはないと思ひまつさ。彼の處へ——私の可哀さうな息子の處へ行くのは。

ミシヨ。(眞面目に)ねね奥様。私はた勧めしやうと思つて上つたのですが。私の氣附いてたことを、露骨に申しませう——しかし只だ二人でなくつちや。

ローラン。貴方だけが小母様ぞ。

ミシヨ。然うだ。

グリヴェー。諾し、直ぐ行くよ(後戻りしながらミシヨに)忘れては不可せ、二匹の貨してあるんだぜ、ミシヨ様。濟んだら一寸呼んで呉れ——直ぐ來るから。

グリヴェーとローラン。(中央の扉を通つて来る)

## 第五場

ミシヨー。夫人。

ミシヨー。奥様、悪く思つて頂いちゃ困りますが、少しばかり露骨に――

夫人。で、何を。彼女さへ助かることなら。

ミシヨー。(聲を低くして) テレーズ様を結婚させなくちや不可ん。

夫人。結婚を。あゝ、それや残酷<sup>むご</sup>にます――カミーユを二重に失ひます、可哀そうに。

ミシヨー。狼狽<sup>あはて</sup>することは要りません。私は貴方程驚きはしない。私が、私が何なら醫者になつて上げませうか――を望みどあれば。

夫人。いゝね、それや駄目だす。貴方も彼女<sup>あれ</sup>の涙は御覧になりましたやろ。そんな話は怒つて拒絶<sup>こきり</sup>りまつせ。息子<sup>こ</sup>を忘れどりはしまへん。其麼氣は些とも居まへんね、ミシヨー様。テレーズに結婚<sup>むつか</sup>は難しうれます、カミーユを胸に思ふどりますさかい。其麼事したらカミーユに濟まんわけや。

ミシヨー。勿論、迂濶<sup>こ</sup>には言はれませんが。しかし――夜<sup>よる</sup>、恐<sup>こは</sup>がるやうな女には――解らんかな――保護するものが要るのですよ。亭主が要るのですよ。

夫人。そんなら、見たこともない赤の他人が突然この家に入つて來んならんのですか。飛んでもない奴を、掴まされたばかりに、僅かばかり残つてゐる悦びを家から追出して、年老<sup>こし</sup>つた私が又しても、悲しい日を送らんならんかも知れまへん。いゝやゝ、後生<sup>こせう</sup>だつさかい、私をこの今の、悲哀<sup>かなしさ</sup>と一緒に死なしてね

吳んなはれ(左方自分の肘掛椅子に坐る)

ミシヨ。それや勿論でさ、良い男を捜さなくちやならんのは。テレーズ様のためにや良い御亭主で——貴方のためには良い息子様むすこといった風の——カミィヨ君の代りが立派に務まるやうなね——つまり——私の思ふには——ローラン君が如何かと思ふのです。

夫人。ローランが。

ミシヨ。ねえ然うですよ勿論——好い夫婦ぢやありませんか、奥様、これが私のたすめ勧告です。二人は是非夫婦いっしょにしなきゃ不可いけませんん。テレーズ様とローラン君と。

夫人。(甚く呆れて居る。しかし駭きはしない)テレーズとローランとを。

ミシヨ。然うですよ。私が斯う言へば、その時は驚いて聲を立てなさるだらうた、私も初めから承知して居ました——随分前から心に思つてた計畫なんです。熟うく考へて御覽なさい。私の經驗を信じて下さい。年老つてから、も一度最後の悦びを作らうと思ひなさるなら、そしてテレーズ様を、あの悲しみから救うて上げる決心おつもりなら、次第に弱りなさるぢやありませんか——世界中捜しても、何處にローランより好い聲が居ります。

夫人。彼等あれは兄妹きょうだいみたいに思へまんね。

ミシヨ。まあ兎に角、ひとりで考へて御覽なさい。私は貴方等皆しあはせなが、幸福で満足してゐる處が見たいのです。楽しい時が再また來ますぜ。死水しにみづとつて呉れる子が二人も出來ますぜ。

夫人。貴方は本當に口説くのが上手や。しかし貴方の仰言おっしゃることは尤もです。少しは私にも慰藉なぐさが無なうては

行り切れまへん。さうは言ふものゝ、又不良わるいことをするやうな氣がしてな。カミーユが罰でも當てはしまへんやろか、此麼早う忘れたら。

ミシヨ。誰が忘れるなんて言ひました。ローランは始終しよつちうカミーユ君の名を、言つてゐるぢやありませんか。

馬鹿々々しい。ローランは今だつてもう貴方の息子ぢやないか。

夫人。然しな。私も此麼に年老つた氣がするし、脚は言ふことを聞かぬし——力は無くなるし——眞實に、もう靜かに死ぬより外の望はたまへん。

ミシヨ。然し、まあ左様言はずに——納得して下さい。いや私を信じて下さい。あの二人が友情の穢たがを、今迄よりも少し固く引絞めるだけで——それで可いんです。それから又貴方、私は貴方を小さい可愛いのを、足下で遊ばす祖母様おばあさまにして見たいのですよ。

夫人。(微笑する)

ミシヨ。如何です、笑ひなすつたね。私には熱く解つてゐるんですよ、如何言へば貴方が笑ふか。

夫人。いね、不可いけまへん。笑うては不可いけまへのでした。私は此麼に悲しうたますのに。そやけど、彼等二人はなる氣がたまへんものなあ。其麼ことは思うても居やしまへんもの。

ミシヨ。なあに、私等で好いやうにしますさ。二人とも賢いから、結婚するのが此の家の幸福のために、必要べつぎだ位の事は直ぐ理解さかりしますよ。さういふ風に言つて、二人を説伏せふくせなくちや駄目ですぜ。ローランは私が引受けます。直ぐ納得しますよ、彼は。一緒に店を閉める時、言うて聞かせませう。その間に貴方はテレーズ様と話をつけなきあ不可いけまへんぜ。今夜のうちに盃だけは爲せときませう。

夫人。(並りながら) 私は手足が顫ひます。

ミシヨ。靜かに。來たから。貴方と二人切りにしときますよ(中央の扉を通つて去る)

テレーズ。(相變らず甚く惘然として左方によつて来る)

## 第六場

夫人。      テレーズ。

夫人。何やつたの、テレーズ。今晚はた前、未だ一言も口を利かへんやないか。た願ひやよつてに、その悲しさに克つやうにしてた呉れ、た客のためや思うて。

テレーズ。(不明確な動作をする)

夫人。それや熱くた母様も知つてゐるよ、苦しさは自由にならん位ひのことは。快うないのかいな。

テレーズ。いゝね、たゞ疲れたけなの。

夫人。快うないのなら、左様言はな駄目で。養生もせんといて、苦しんどつたつて不可ん。動悸でもするの  
かいな、呼吸困難のかいな、心配でも有るのかいな。言はな解らへんがいな。

テレーズ。其處ことは些つともないのよ。私にも解らないの——だつて何處も不快い處は無いんだもの。何  
だか身内の器官が全り働かなくなつたやうな氣がするわ。

夫人。テレーズ、た前が包隠しするよつてに、私は如何苦しいや分らへん、默言つてむつつりしてゐるよつて  
に——私は、唯だた前を——

テレーズ。叔母様は私に——忘れるやうにつて仰言るんでせう。

夫人。其麼ことを言うた臆は有らへん。如何したつて、其麼ことは、よう言はん。けんごなあ、熟う訊い  
どかならんやが、私の苦しさは私の苦しさで、お前の知つたことや無いねんさかいな——訊ねるの  
やけれど、お前には慰藉になることは、もう無いのか。正直に打あけて言うてお呉れ。

テレーズ。(曖昧な言ひかたをする)私は疲れてるの。

夫人。言はな不可ん。お前は身を任して、頼る人が無いよつてに、始終そない鬱いでのやないか。お前位  
ひの年で、泣いてばかりも居られへん譯や。

テレーズ。(傾聴しながら、緩やかに)叔母様の仰言ることが、私には解りません。

夫人。何も言ふとらへん。私は訊ねてるねんで——お前が何故苦しんでるのや、知つとかならんよつてに  
なあ。それやもう間斷なしに、愚痴を言うたり泣いたりする女と一緒に居つては、お前の氣の晴れぬの  
も無理は無いねん。そこで、このがらんとした寂しい部屋を——大方お前の願ひでは——

テレーズ。(急に)私に願ひなんぞ有りません。

夫人。静かにして、もつと聞いてお呉れ。嫌あなこと——私は其麼こと思ひもせねへんけれどなあ。お母  
様等は——お前を、もう一度結婚さそうと思ふねん。

テレーズ。(怒り出す)私を。い。わ。不可ん。何だつて私を疑ふの。

夫人。(深く感動して)私も、それや直ぐに左様言ふたんやけど——彼女はお忘れとらしまへん——忘れたりなん  
か、得うしまへん。「胸に何時でもカミューを思ふとります」言ふたんやけど、皆なが無理に言はすもん  
やさかい。けんごなあ御前、皆様の仰言ることが本當や。この家は悲哀に充ちて居る、直に人様に見捨て

られてしまつて、寂れ果ることやらう。左様して呉れ——な、皆なのお勧めに従つて呉れ。

テレーズ。(強く) 如何しても嫌です。

夫人。其謾言はんと、何卒手を合すさかいに承知して呉れ。私が説伏せられた理由は、もう思出されへんけど、何でも道理なことやと、思はずには居られなんだ。それで、お前に納得さす役を、私は引受けたんやが、何ならミシヨ一様を呼んでも好む。ミシヨ一様やつたら、私より解るやうに言ひなはるならう。

テレーズ。(劇しい疑懼) 今日は耳聾です、何も聞きません。構はないで下さい——後生だから。結婚さすつて——それや——誰となの。

夫人。好む思附きやねんせ。あの人を前にちうので——ミシヨ一様が納得さすことになつて、今、恰度、話してる處や——ローランやがいな。

テレーズ。ローランと。ローランの事なんか考へて被居つたの。でも私は嫌ひですわ。好きにならうと思ひませんわ。

夫人。お聞きよ、まあ——皆様の考へも尤もや故。私も皆様と同じ意見や。ローランは家の者や言うても好む位やないか。親切にして呉れるし、よく手傳うて呉れるし。最初は私も、お前と同じで驚いたもんや。何やら善うない事をするやうでなあ——しかし又思うて見ると、カミーユの友達と結婚したからつて、お前の生命の親と夫婦になつたから言うて、何もカミーユの位牌を汚す譯は無いちう氣もしてなあ。テレーズ。でも私は、此處に悲しいんだもの——何日まで經つても悲しさが、無くなりそうもないもの。

夫人。何のく、私がお前の涙と戦つてみせる。お前と私の苦痛を負かして見せる。あれは皆様が私等の爲



やと思つて、言つて下はつたことや。唯だ私等が今一度、幸福になるのを見たいのや。皆なの言やはることが好いやないか。そうなれば、私を又氣輕う樂しうして、靜かに極樂往生の出來るやうに、助けて呉れる子が二人出來る譯やといな。私は勝手者や。どうでもた前の、も一度、笑ふ顔を見なならん。何卒そうして呉れ。私のためや思つて。

テレーズ。まあ叔母様が。私は如何なつても好い。仰言る通りになりますわ。私の胸には、叔母様の氣が靜まるより――叔母様の幸福を願ふより、切な望は無いのだもの。

夫人。よう言ふて呉れたく、た前は好わ娘やつめて笑はうとする。た蔭で私も返咲きする。皆なで氣持よく家の設備をしやうな。暖かう樂しう周圍が成らな駄目。ローランは、私等二人を愛さな不可ん。なあテレーズ、少しは私も一緒にローランと結婚するねん故、時々は貸さな許容へんで、私に、た母様に。ローランは二人で要る譯やなあ。孰も幸福にせんならんとは忙しいこつちや。

テレーズ。ねえ（右手奥の方へ行く）

夫人。（深く感動して）有難う。有難う。た前は私を幸福にして呉れたなあ（感動して椅子に腰を落す）たカミーユや、カミーユや、た母様はた前に初めて反いた。

ミシヨ。〇（中央の扉を入つて来る）

## 第七場

テレーズ。

夫人。

ミシヨ。

ミシヨ。〇（低く夫人に）遂々納得させました。だがね、馬鹿に骨を折らせましたよ。同様、貴方のために左

様するそうです。何もかも列べ立てゝ見ましたら。直ぐ上つて來ます——店を閉めてるんです。そして

テレーズ様は。

夫人。(低く) 同様、承諾しました。

ミシヨー。(右手奥に居るテレーズに歩寄つて低く語をする)

シユザンヌ。(グリヴェーと話しながら中央の扉を入つて來る)

## 第八場

前場の人々。      グリヴェー。      シユザンヌ。

シユザンヌ。いね／＼駄目よ、グリヴェー様。貴方は利己主義者だから——結婚式の日だつて、私貴方と舞踏はしてやらないことよ——何ですつて。貴方の結婚しないのは、唯だ貴方の詰らぬ習慣が破られな  
いためなんでせう。

グリヴェー。勿論だよ、それや。勿論のこと。

シユザンヌ。まあ嫌あな人。一足だつて、貴方と舞踏するのは御免だわ。一足だつて(テレーズとミシヨーの傍へ行く)

グリヴェー。若い娘達は、結婚なぞ何でもないものと思つて居るが——私は五遍も試つて見たのだ(夫人に貴方は御存知だが、一番後の瘠せたピアノの女教師との話は、もう少しで事實になる處だつたなあ。話は既に決定て居たのに。萬事何も彼も立派に手順が出來てたのに、彼女め、毎朝ミルク入りの咖啡を飲むと言ひ居つた。ねね奥様、ミルク入りの咖啡をですせ、私は咖啡を見るのも嫌ひでねね、三十年も前から

チヨコレートを飲んでるんです。——これちや私の生活を全部覆す譯ちやありませんか。それで話は纏まらずに済んだ。でも私に無理はないでせう。

夫人。(微笑して)無理なもんですか。

グリヴェー。な、然うでせう。貴方が理解して呉れて嬉しい。お互ひに理解さへすれば、事や已に成れりだ。

それでミシヨ様も、テレーズ様とローラン君とが、互ひに理解することを、直ぐに見て取つたのだなあ。

夫人。ほんまに然うだつしやろ(立上る)

グリヴェー。然うだともく。夫婦の間といふものは、互に理解し合ふことが何より肝要だ。さもない時に

は、仕事の罅が開かいで困るものだて(時計を見ながら)おや大變、十一時五分钟前だ(左方によつて腰を下して、ゴム

靴を穿き雨傘を取る)

ローラン。(中央の扉を入つて来る)

## 第九場

前場の人々。ローラン。

ローラン(夫人に)今ミシヨ様と、貴方のことを話したのでした。貴方の幸福に就いて。お母様——私等二人は、貴方を眞に眞に幸福にして上げたいと思ひます。

夫人。(甚く感動して)左様やつたかく、ローラン。お母様とお言ひだつたな——

ローラン。テレーズ。貴方もお母様が再び幸福に成つて、満足なさるのを願うてお坐でだらう。

テレーズ。願ふどりますわ。たい御相談して置きたいのは世帯のことですの。

夫人。たゞ御前達（兩人の手を取つて確く握り緊めて居る）貴方はなあ、此女の世話を見てやつて呉れ。ローラン。  
そして元のやうに幸福しあはせにして、氣の晴れるやうにして遣つて呉れ。そしたらな。カミリヨも、貴方に  
御禮を言ひまつしやろ。あゝれ陰で私も、ほんまに幸福しあはせになりました——天帝様が怒つて、私等を罰し  
なはらんやうに祈つときまへう。

（未完）

Universal = Bibliothek, No.4092. Therese Raquin に據る

戯曲 白鳥の歌 （一幕物）

アントン・チエホフ作

文三 專崎 ヒ ヒ ム 譯

人物

ワシリ・スウイートロウイドフ。

（喜劇役者。六十八歳）

ニキータ・イワニツチ。

（老いたる後見）

田舎芝居の舞臺。夜、芝居の打出うちだし後。右手、粗き素木の戸、數枚列ぶ。それより樂屋に通ず。左手と正面は、種々なるがらくたの  
大道具、小道具にて舞臺を仕切るしき。舞臺の中央に破れ腰掛一つあり。

役者。（蠟燭を片手に、樂屋より出て来る。笑ふ。）オヤオヤ、こいつア妙みょうぢや！ こゝの方がよつばごしやれてらア！